

千葉市美術館
アーティストプロジェクト
報告書

つくりかけラボ09
大小島真木 |
コレスポンダンス

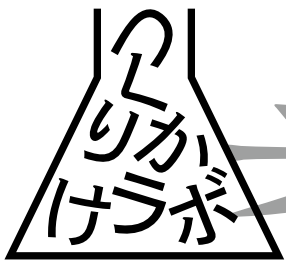
会期
2022年
10月13日[木] - 12月25日[日]

アーティスト
大小島真木

テーマ
素材にふれる

概要
「つくりかけラボ」とは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間をつくり上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。

第九回は大小島真木さんをお迎えしました。大小島さんは様々な生物のまなざしを自らの内に宿し、万物の記憶の集合体としての世界のありようを追求してきました。「人間以外の目線で世界を語る」というテーマのもと、会期中に繰り広げられる「ゲスト」たちとのトークや、来館者たちとの往復書簡「Dear Human」を糧に、アーティストがどのような空間を作り、変化させたのかをここでご報告します。



人獣

人間を意味するヒューマンの語源は「腐植土」を意味するラテン語のhumusから。

珊瑚

炭素、酸素、水素、窒素、カルシウム、リン、カリウム一星々と私たち生き物は同じ原子から出来ている。

糞

〈私〉なのだろうか。

排泄物はいつまで

川は、山から流れる
僕らの血だろうか。

山

私は海の上で大きな鯨の死骸を見た。生きて、時は多くの命を食べていただろうその鯨が、その時、多くの命によって食べられ、海の中へと溶け込んでいこうとしていた。途方もないほどの永い時間、繰り返されてきたことだ。まるで「生命のスープ」だと思った。

粘菌

「身体」を、環境から独立した単独の存在としてではなく、複数のものたちがそこに棲まい、協働し、協奏する「共生一共死圏」としてRe-Formすること。



写真上から: 壁画部分 / 〈胞衣〉 / 制作室 / 〈胎〉部分

コレスポ
ンダンス



薄暗い廊下からガラスに目を向けると、いくつかの視線がこちらを向いている。中にはたくさんの道具が置かれ、なにか生き物の音がする、気配がする。部屋に入る前、ここには少し怖いものがあるの
だろう、あるいはここはどうなっているのかな、と興味がわいたり。そう
感じながら部屋に入った方も多いのではないのでしょうか。
大小島さんが手がけたつくりかけラボのスペースは、展示室と制
作室でわけられ、5つの音を含みながら、壁画、映像、立体、絵画作
品が徐々に設置され、作品は日々増えていきました。来場者は赤い
布の上に座り、作家が選んださまざまな本を広げることもできました。
途中から透明のカーテンをくぐって制作室にも入れるようになり、作
家が制作している空間でまさにいま使っている画材、土、読んでい

る手紙などを目の前で見る事ができました。
このスペースと、会期を通して開催されたオープンワークショップ
「Dear Human」。6人の方をお招きし、パフォーマンスと対談を行
なったイベントシリーズ「万物は語る」。アーティストワークショップ
「万物への手紙」。すべて作家本人による丁寧な道案内のおかげ
で、この場所を体験した人の中には、壮大なスケールで人間の存在
そのものや、人間と環境の関係を改めて考え直す方も多かったよう
です。
そんな〈コレスポンドンス〉を写真や作家へのインタビューで振り
返ります。

〈コレスポンドンス〉を終えて

——まず最初に、今回のプロジェクトタイトルである〈コレスポンドンス〉
という言葉に込めた思いをあらためて教えてください。

大小島(以下、大) 今回はこの〈コレスポンドンス〉という言葉に二
つの意味を込めてみました。一つ目は一般的な訳である「往復書簡」
という意味。そしてもう一つは、詩人のボードレーが自作に用いた「コ
レスポンドンス」、これは「万物照応」という風に訳されています。実
際に世界は人間を含めた万物が互いに照応しあうことで初めて立ち
現れてくるものですね。万物があることによって初めて私もありえる。
言ってみれば、世界は万物同士の往復書簡が行き交う交通の場
であり、また交通そのものだと思うんです。だから、今回は展示空間をそ
うした万物照応的な世界の一つの縮図と見立てて、あらためて万物
と文通していくことができるような場を作ろうと思ったんです。

——今回の舞台となった「つくりかけラボ」は展示制作のプロセスそ
のものを観客に公開していくという展示方式になっています。これは一
般的な展覧会、つまりすでに完成された展示を公開するという方式と

は大きく違いますよね。実際に会期を終えてみていかがでしたか？

大 面白かったですね。ここでは作家が作品や展示をつくっている状
況そのものに鑑賞者が出くわすことができるようになってはいますが、
これは作家の側としても同様であって、制作の過程において作家もま
た鑑賞者の方々と出くわすことになるんです。すると、そこに交流が生まれ、
その交流や反応を通じて、作家も作品も鑑賞者も変化していく。まさ
に照応関係が生まれる。作品が作家の手だけでつくられた絶対的
で完成されたものとしてではなく、つねに動的な状態に置かれ、ネット
ワークの中で変容していくというのは、とても刺激的です。

——大小島さんは以前から協働制作や公開制作の機会を多く持た
れていて、開かれた環境で制作をするという経験は今回が初めてで
はないと思います。そうした過去の経験と比較した際に感じた違いなど
はありましたか？

大 まず今回は展覧会としてはかつてないほど会場に滞在しました。
また、アーティスト・イン・レジデンスなどにおける滞在制作や、壁画の
公開制作なども違う感触がありました。感覚としては、アトリエをその

まま美術館に持ち込んだようなイメージです。展示室には私の作品だ
けではなく、私が影響を受けた本なども並べていましたし、展示室と
制作室を隔てているのも透明なカーテン一枚で、制作室の中にも来
場者の方々が入って来れるようになっていましたから。どこか私がつく
った巣の中に、あるいは私の思考の胎内に侵入されているような感じも
ありました。みんなが私の胎内に入ってきて、何かを感触し、その痕跡
を残していつているかのような。

——展示室には円形の赤い敷物の作品もありましたが、大小島さん
はあの作品を「胎盤」と見立てていましたね。

大 はい。あそこは来た人が中に入ることができるスペースにしていま
した。並べてある本を読んでもらったり、カーティス・タムさんと協働制
作した5チャンネルの音に浸ってもらうための場として。

——「つくりかけ」というテーマについてはどうでしょう。つくりかけで始まり、
つくりかけのまま終わっていく。そのテーマが暗に示しているのは「完成
した作品」というアイディアが実はそもそも虚構なのではないかというこ
ただと思うんです。その点、大小島さんはキャリアの初期より、この「完成」



10月16日:石倉敬明(人類学者・神話学者)



10月23日:足立薫(霊長類社会学者)



山



10月29日:唐澤太輔(南方熊楠研究者)
パフォーミング・後藤那月 スライド・金子美葵

糞



11月5日:アヌスライ・ニシゲ(海洋生物学者)



12月23日:北村明子(振付家ダンサー)



11月13日:伊沢正名(糞土師)

珊瑚



—「Dear Human」をうけて
《オシラ》

—「猿」をうけて
《混群》



—「猿」をうけて
《サコグロテイスの実》



—「珊瑚」をうけて
《生命のアトル》



—「糞」をうけて
《糞新世》



—「身体」をうけて
《世界明》



—「粘菌」をうけて
《私はいつでも私たちになれるし、私たちはいつも私になれる》



—「山」をうけて
《山は地球の皮膚である》

本プロジェクトの一環として、会期中何回かゲストをお招きし、会場において「万物が語る」というコンセプトのトーク(パフォーミング)を開催。ここではゲストの方々に人間以外の存在、山、猿、粘菌、珊瑚、糞、身体になりきっていただき、その視座において、世界のこと、人間のこと、自分のことについて、語っていただきました。作家はイベントをうけて新しい作品を制作しました。ここではその一部をご紹介します。

Dear Human



来場者が書いた手紙は、「Dear Human」の冊子にまとめられ、会場で公開されました。

というアイデアを疑ってきた作家であるように思います。キャンパスに描かれた絵画を種に、壁面に向かって絵を拡張させていく「はみだし壁画」シリーズをはじめ、ある展示では単独で展示された作品が次の展示では別の作品の部分になっているようなケースが多くあります。

大 あらゆるものがマイクロもマクロも含めて入れ子状になっているという感覚が私には常にあるんです。そうした入れ子の連鎖として世界がある。たとえば私自身の肉体もそうで、一応は完成された輪郭が皮膚として存在しているようにも見えるけど、見方を変えるとその輪郭がどこまで伸びているのかは分からなくなる。身体の中で身体を構成している無数の菌や細胞の輪郭も私の一部と言えるのではないか、あるいは私がこの地球で生きることを可能にしているオゾン層もまた、私の拡張された輪郭と言えるのではないか。私の輪郭は決して閉じきってなっていないし、また単独で完結していると言ったこともできないんです。作品も同じですね。一応ここで一つの作品として輪郭を持たせてみたとしても、環境や見方が変われば、その輪郭は自ずと変わっていくし、変わっていかざるを得ないものですから。

いまだ“つくりかけ”の世界で

——今回の展示中に開催したイベント「万物は語る」もまた私たちの輪郭を捉え直す一つの試みだったように思います。「万物は語る」についても聞かせてもらえますか。

大 今回、〈コレスポンドス〉というテーマで展示を行う上で、実際に万物と語ってみたいと思ったんです。ただ、万物といっても広いですし、そもそも人間でない以上、人間の言葉を話せない。そこで、私が気になっているいくつかの存在を勝手にセレクトして、それらと深く関わってきた人たちに「擬いて」もらい——つまり語り部になってもらい、それらの言葉を話してもらおうと考えたんです。今回は山、猿、粘菌、珊瑚、糞、身体という6つのゲストを招きました。

——「擬く」*というのは、大小島さんの制作においても重要なテーマだと思いますが、見方によっては人間が人間以外の対象に想像力を用いて「擬く」ということに暴力性を感じるという人もおられるかもしれません。大小島さんはこの「擬く」という行為にどのような意義があると考えていますか？

大 今回、語り部の皆さんにオファーした際、皆さん口を揃えて「これまでその対象そのものになって考えてみたことはなかった」とおっしゃっていたんです。それはつまり、これまでは研究する対象そのものを見つめ続けていたということですね。ただ「擬く」という行為をするためには、それだけでは難しい。自分自身をあらためてその対象の内側から見る、山だったら山から、珊瑚だったら珊瑚から見られてみるという体験が必要だと思うんです。人ではないものを擬人化する行為にはある種の

暴力性が含まれているようにも思えるけど、世界をありありと感じる、万物にまなざされているという感覚を得るという体験には、すでに「擬き」の契機が含まれているようにも思います。もちろん今回のパフォーマンスはあくまで一つのバージョンでしかなく、他の語り方もきっとあるんです。ただ本当に重要なことは、その声に耳をすませてみるということ、それ自体でもある。今回のパフォーマンスはそうした体験を通じて、あらためて「私たち」の輪郭を引き直していくための一つの試みでした。

——今回はもう一つ「Dear Human」というオープンワークショッププログラムも行われていました。

大 はい。「Dear Human」では来場者の皆さんに人間以外の何かの視点に立ってもらい、人間へと宛てた手紙を書いてもらいました。面白かったのは「万物は語る」が割と普遍的な対象、種や地形や現象を招いていたのに対して、「Dear Human」ではもっと具体的な対象、それこそ自分が小さい頃に大事にしていたぬいぐるみのような身近な存在が語り手になっていたりして、より私的な語りが多く見られたことです。プログラムを通じて、忘れかけていた記憶がフラッシュバックするような、そうした体験に繋がったのかもしれない。それは予想していなかったことなので、とても新鮮でした。もちろん、中には雪になったり土になったり動物になったりと、いわゆるアニミズム的な語りもたくさんあって、全て興味深く拝読しました。

ただ、語りそのもの以上に重要なこともあります。多分皆さん、手紙を書こうとする上で一度、自分の周囲をキョロキョロと見回してみたと思うんですよ。今自分を取り巻いている環境もそうだし、これまで生きてきた時間もそうだし。その中でふと目に止まったものの視点に立って書いてくれたんだと思うんですけど、私としては、まずそのキョロキョロしてくれたということ、万物照応の森の中に立ってあたりを眺めまわしてくれたということ、あるいはその森で迷子になってくれたということ、そうした体験がみんなの中に残ったなら、それが一番豊かなことなんじゃないかなと思っています。私自身、森の中で迷子になりたいと思いつけている人間ですしね。

あともう一つ、このプログラムをつくりかけラボで行えたこともとても良かったです。世界にはたくさんの神話があって、それらは今日、すでに完成された歴史の遺物のようなものとして見なされがちですけど、実はそうした神話もいまだつくりかけなんですよ。皆が書いてくれた手紙を読みながら、いままさに神話が再び生成されていっているような感触を得ました。私たちはつくりかけの神話、つくりかけの世界を生きていて、そしてこれからもそのつくりかけの世界を、万物とともにつくり続けていく。そんな風に思えた。これもまた、今回の〈コレスポンドス〉を通じて得ることのできた大事な手応えです。

聞き手／辻陽介

*もどく。他のものに似せてつくり、振る舞ったりすること



アーティストワークショップ「万物からの手紙」

会期中一度だけ行われたアーティストワークショップ。参加者は大小島さんからの言葉を聞きながらいくつかのオブジェや作品を触り、最後には「Dear Human」を書き残していききました。



〈コレスポンドス〉では、「Dear Human」というオープンワークショップも行っていました。これは来場者の方々が、それぞれ人間以外の何かになりきって、人間へと宛てた手紙を書くという〈遊び〉。会期中は、そのようにして書かれた手紙の一部に対して、作家のドローイングによる応答も行われました。

「つくりかけラボ09 大小島真木 | コレスポンダンス」

会期

2022年10月13日[木]ー12月25日[日]

主催

千葉市美術館

企画協力

丸山晶崇(株式会社と)

協力

KAAT芸術劇場

カーティス・タム

辻陽介

秋田公立美術大学粘菌研究クラブ

横山裕章

会場施工

株式会社 Office Toyofuku

グラフィックデザイン

丸山晶崇(株式会社と)

オープンワークショップ「Dear Human」

参加者396人

トークイベント「万物は語る」

10月16日[日] ゲスト「山」 語り部 石倉敏明 参加者28人
10月23日[日] ゲスト「猿」 語り部 足立薫 参加者20人
10月29日[土] ゲスト「粘菌」 語り部 唐澤太輔 参加者31人
11月5日[土] ゲスト「珊瑚」 語り部 アグスティーン・シルバン 参加者23人
11月13日[日] ゲスト「糞」 語り部 伊沢正名 参加者34人
12月23日[金] ゲスト「身体」 語り部 北村明子 参加者44人

トークイベント「万物は語る」 司会進行

辻陽介

アーティストワークショップ「万物からの手紙」

12月10日[土] 参加者4人

作品

《ヴェヌス Venus》映像 2020

《Re forming (I)》映像 2022

《細胞記憶 Cell-Memory》写真スライド映像 2022

《Correspondance (仮)》壁画、ミクストメディア 2021-22

《胎 Pedestal of the moon》インスタレーション 2022

《混群体 Mixed-colony》ミクストメディア 2020-22

《鞭毛 Flagellum》ミクストメディア 2019-22

5 サウンド・ステーション

カーティス・タム

1 Abiogenesis 生体発生

2 Differentiation 分化

3 Individuation 個体化

4 Rhythm 律動

5 Play 遊戯

撮影

千賀健史(p.1, 2, 3, 6, 8)

加藤健(p.2, 3)

足利森(動画)

松岡慎吾(p.5)

大洞博靖(p5)

来場者数

2,843人(大人2,360人、中学生以下483人)

「つくりかけラボ09 大小島真木 | コレスポンダンス」

報告書

執筆

大小島真木

辻陽介

表紙フォーマット

加藤賢策(LABORATORIES)

印刷

株式会社エイチケイグラフィックス

編集・発行

千葉市美術館

デザイン・編集協力

丸山晶崇(株式会社と)

発行日

2023年3月31日

こちらのQRコードより
本展覧会の動画サイトに
アクセスできます。

